

基礎学力の養成を通して

自発的学習意欲の発現を待つ

松江西高校では、教師による外発的動機付けによって学習面での自己肯定感を高めながら、キャリア教育によって自ら学習を継続していく力を持った生徒へと成長させていく教育フローを展開している。学習全般に対して苦手意識を持った生徒をどのように支え、学習の軸をつくっているのか。生徒の変化をつぶさに観察し、軸の形成を根気強く待つその指導について、主に初期の学習指導を中心に聞いた。

基礎学力を身に付け、 「未見の我の発見」を実現

創立90周年を機に、現代の社会環境を踏まえて「育てたい生徒像」を「基礎・基本を身につけ、将来像をもった明るく活力ある生徒」と改めて明文化した松江西高校。その実現のため、基礎（学力）の確立の具体的方策として、「基礎力養成」「学び直し」「語彙力養成」という3つの取り組みを打ち出している。そのいづれもが、授業や朝学習、補習などでの教師の外発的な動機付けによって行われる取り組みである。

塩冶静雄校長は「勉強に苦手意識を持つ生徒に、やれば出来る、分かる、面白いという自己肯定感を抱かせるためには、最初は強制的に取り組ませる必要がある」と説明する。

「本校に入学してくる生徒は多様で、1年生の段階では高校で必要な基礎学力や基本的な学習習慣が身に付いていない生徒も見られます。そうした生徒を、変化の大きいこの社会で活躍できる実践的人材に育てるためには、自分でも気付かない力や魅力を、部活動や学校行事、そして学習活動で発見させ、自己肯定感を高める必要があります。本校におい

ては、強制的な学習活動も教育テーマである『未見の我の発見』を実現する場の1つなのです」（塩冶校長）

成績不振者に補習参加を義務付けると、ほとんどの生徒が「部活動があるから参加したくない」などと抵抗を示す。その原因は、高校入学までに学習面で手を掛けられる経験が少なかったからではないかと塩冶校長は考える。だからこそ、教師が根気強く参加を勧め、「やれば出来る」体験を味わわせると、「勉強が意外に楽しいことが分かった」という言葉が生徒の口から出てくる程、生徒は大きく変化する。

国・数・英の3教科の 基礎固めにこだわる

取り組みの内容を具体的に見ていこう。同校の「基礎力養成」は、1・2年生を対象に「基礎力診断システム」という基礎・基本を養成する講座として実施されている。講座の基盤になっているのが、年間4回実施されるベネッセの「基礎力診断テスト」(*1)だ。「基礎力診断テスト」では、生徒の学力は学習到達ゾーン(GTZ)としてA1からD3までの12段階で評価される。同校では、D3の評価となった生徒に対して、

*1 ベネッセの『進路マップ』の教材の1つで、GTZ(学習到達ゾーン)という指標で生徒一人ひとりの基礎学力の定着度を測るテスト。



松江西高校 校長
塩治 静雄 えんや・しずお
教職歴37年。同校に赴任して38年目。「想い続け、挑み続け、諦めなければ、いつかはいつかきつと来る」



松江西高校
田中敏彦 たなか・としひこ
教職歴34年。同校に赴任して35年目。国語科主任。「何事も生徒の目線で考えることを心掛けている」



松江西高校
松浦生士 まつうら・せいじ
教職歴9年。同校に赴任して10年目。進路・教務担当。「生徒勉強、一生青春、いつまでも心柔らかに」



松江西高校
角田大地 つのだ・だいち
教職歴3年。同校に赴任して4年目。進路・教務担当。「常に先を見据えて今できることを考えたい」

松江西高校

「真に社会に役立つ実践的人材の育成」を建学の精神とする。「普通科」(特進・総合の2コース)と「総合ビジネス科」(情報・会計・ビジネスの3系列)を設ける。大学・短大への進学が約7%、専門学校への進学が約45%、就職が約45%。

◎設立 1924 (大正13)年

◎形態 全日制/普通科・総合ビジネス科/共学

◎生徒数 1学年約160人(総数493人)

◎2014年度入試合格実績(現役のみ)

国公立大は、島根大、高知大、島根県立大に合格。私立大は、神奈川大、大阪成蹊大などに合格。

◎URL <http://www.matsuenishi-h.ed.jp/>

次の基礎力診断テストの2週間前から、専用テキストを用いた国語、数学、英語の補習への参加を義務付けている。

補習の時間は毎日放課後の50分間。少人数で一人ひとりが分かるまで教えられるので、ほとんどの生徒がここで達成感を得ることが出来る」と進路・教務担当の松浦生士先生は説明する。

「実際、補習に参加した多くの生徒が次の基礎力診断テストでD3ゾーンを抜け出します。『自分もやれば意外に出来るんですね』といった声をよく聞きます」

「基礎力養成」の取り組みでユニークなのは、年度やテスト回によって、補習の強制参加対象者を微妙に変化させている点だ。

「D3の生徒が全員参加なのは変わりませんが、対象をそれだけとせず、2週間の補習のうち、最後の3日間は全ての生徒を強制参加としたこともあり、上位の生徒に補習を行ったこともあります。その狙いは、私たち教師が、授業とは異

なる学習の場に立ち会うことで、自校には多様な生徒がいるのだということ深く理解するためです。3教科以外の先生が、上位層の生徒の補習の講師を行ったこともあります」(松浦先生)

また、同校では、1年生1学期は学び直しの期間と捉え、ベネッセの「マナトレ」(*2)を活用し、中学校までの国語・数学・英語の復習を徹底している。以前は1学期の中間考査までを学び直しの期間としていたが、更に十分な時間を掛けた方がよいと判断した。

簡単な問題から取り組んで達成感を味わいながら基礎を固めることで、生徒は2学期以降、円滑に高校の学習内容に入ることが出来る」と国語科主任の田中敏彦先生は言う。

「これまで全く国語の学力を身に付けてこなかった生徒が、高校の学習領域のテストで高得点を収め、我々を驚かせることもあります。客観的に見れば『マナトレ』の内容は平易ですので、それだけで学力が大きく向上するものではないでしょ

う。しかし、学力を『学びに取り組める力』とするならば、学び直しには確かな成果があると思います」

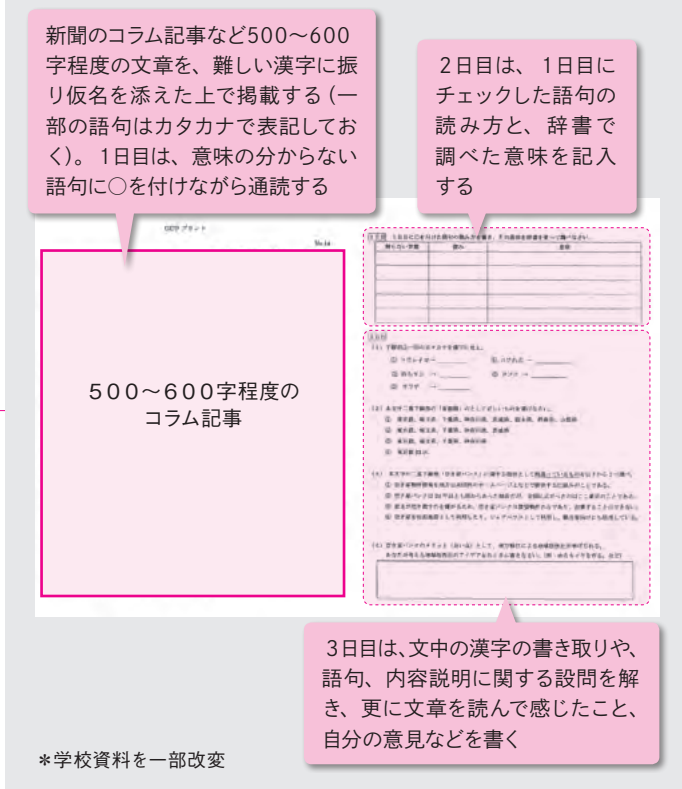
言葉の力を3日間1サイクルで高め、内発的学習を促す

基礎学力の育成を補完する形で取り組んでいるのが「語彙力養成」だ。授業内容を理解するためには語彙力が必要であり、言葉の力を高めることが、基礎の確立に大きく寄与すると考えたからだ。また、ほとんどの生徒は、推薦・AO入試、就職試験で面接を受け、志望理由書や履歴書の作成が必要になる。語彙・読解力を養成する学習を取り入れることは、希望進路の実現の面でもプラスになると判断したのだ。

同校では、全生徒が週3日、朝学習の10分間を使って、学校独自の語彙力アッププリント(GUPプリント)に取り組む。GUPプリントには新聞コラムなどの短い文章が1つ載っており、1枚のプリントに3日間掛けて取り組む構成となっている(P.18図1)。そこにも生徒の自己

*2 ベネッセの『進路マップ』の教材の1つ。小・中学校範囲の学び直し専用のシステム教材。

図1 語彙力アッププリント (GUPプリント) の構成



肯定感を育むための配慮があると進路・教務担当の角田大地先生は説明する。

「1日目に通読し、2日目に分からない語句の意味を調べ、3日目には漢字や語句、内容説明に関する設問に答え、意見や感想を書きます。じっくりと時間を掛けて読み、少しずつ設問に取り組むことで、時事的な話題を読んだり、意見を書いたりすることへの抵抗感が減ることを期待しています」

2日目の語句の意味を調べる時には、全員紙の辞書を使うことにこだわった。ページをめくり、実際に調べた語句の箇所にもーカーを入れることを通して、学習に取り組んでいるという実感を持たせることを大切にしていたからだ。

入学当初は、意見・感想欄を未記入のまま提出する生徒もいたが、3か月間程朝学習を続けたところ、そうした生徒は減少し、全体的に記述する文章量も増えていった。ま

た、以前より格段に速く、文章を読んだり、分からない語句の意味を辞書で調べたりすることが出来るようになり、3日間で取り組むところを1日で終わらせる生徒も出てきた。

「生徒の様子を見ると、他教科の授業でも未知の言葉に出合った時に辞書を引くなど、分からないことをそのままにせずに調べる習慣が身に付いているようです。また、生徒同士でお互いの辞書の内容を比較するなど、言葉の意味にこだわる姿も見られるようになりました。年1回、全員受験する『語彙・読解力検定』(※3)も、学習に取り組む上での良い目標になっています」(角田先生)

自己肯定感の高まりを待つ 根気強さが教師には必要

「基礎力養成」「学び直し」「語彙力養成」の3本柱で生徒の基礎を厚く固めようとする同校だが、自己肯定感の醸成と、それを土台にした主体的な学習の実現は簡単なものではないと塩冶校長は語る。

「例えば、『基礎力診断テスト』の結果で補習参加を義務付けられた生徒は、確かに次のテストに向けて、

教師に支えられながらも学習に一生懸命取り組み、そして成果を出します。しかし、それで安心して教師の手を離れてしまうと、学習習慣の確立までには至っていないため、次のテストでは再び成績が下がってしまうのです」

全体的には、GTZでD3ゾーンにとどまる生徒は減っており、確かな成果は得られている。また、「基礎力診断テスト」や「マナトレ」に取り組む中で自己肯定感を高め、更に同校が「ジョブカフェしまね」の協力で実施するキャリア教育(※4)を通じて、「将来のために今学びが必要だ」と気付き、主体的な学習に取り組む「軸」を確立する生徒もいる(図2)。だが、全ての生徒が教師の工夫に即座に反応し、学習や生活の習慣が変化するわけではない。

「だからこそ、今度はどの生徒が変化するだろうかと期待しながら、生徒の成長を待つ根気強さが私たち教師には必要なのだと思うのです。学習面で手を掛けてもらった経験が少ない生徒が自己肯定感を高めていくのは、一朝一夕に出来ることではありません。教師がじっくりと見守

※3 朝日新聞とベネッセが共同開発した「ことばの力」を問う検定。

※4 島根県のハローワーク「ジョブカフェしまね」が開発した3年間のキャリア教育プログラム事業に協力。事業終了後も同校で継続実施している。

る中で、焦らず、小さな成功体験を積み重ねていってほしいと思うのです」（塩冶校長）

生徒が変わっていく時期は、本当に様々で、しかも突然だと田中先生も語る。

「つい先日、ある2年生の男子生徒が突然私に『先生、僕は目覚めました。〇〇学を勉強するために大学に行きたいです。だから、もっと勉強します』と自ら宣言しに来ました。どちらかといえばおとなしい性格の生徒だったので、少々驚きました。また、少しやんちゃな生徒が『自分が変わりました。〇〇の仕事を目指して頑張ります』と言いに来たこともあります。その生徒は、『基礎力診断テスト』の補習対象になることが多く、勉強も渋々やっていると、このきつかけがあつて大きく変化したのでしよう。教師としてやはり素直に感動しました。そして、そのような出来事がある度に、中学校時代にどれだけ苦労した生徒でも、私たち高校教師は『この生徒は駄目だ』な

どと決めつけてはいけないのだと、生徒たちに教わる気持ちです」

生徒の中の「軸」の芽生えを察知したい

外発的動機付けから内発的動機付けへと移行し、自ら学び始めた生徒は、周囲に対する感謝の気持ちを述べるようになる」と松浦先生は感じている。

「家族や先生、友だちのおかげで変わることが出来たと話してくれた生徒がいました。入学当初は学校に通うだけで精いっぱいだったその生徒の3年間を振り返ると、自己肯定感が高まり、自分自身を受け入れることが出来たことで、ようやく周囲に対して目が向くようになったのだと思います。自分の存在に自信を持つためにも、高校生にとって基礎学力の定着は重要だと思います」

生徒の言葉に耳を傾ければ、学びの「軸」が芽生えていることも感じ取れると角田先生は考える。

「普段の勉強は嫌いだけれど、GUPプリントは好き」と言い、自発

的に過去のプ

リントに取り

組む生徒もい

ます。社会の

ことに興味があ

つて、自分の

考えを書く

ことが楽しい

のであれば、

それはすなわ

ち勉強が楽し

しいというこ

となのではな

いかと、その

生徒の顔を見

る度に思いま

す。きっとその生徒には、社会に出

てからも学び続けられる『軸』が出

来つつあるのかもしれない」（角

田先生）

生徒は教師が思いを込めて指導す

れば、いつか必ず伸びると塩冶校長

は断言する。

「高校時代に1つでも多くの成功

体験を積みませ、それを礎にすること

で、変化の大きい社会においても学

び続けられる生徒を育てたいので

す。そのためにも私たち教師には、

生徒が生き生きと学べる授業スタ

イルや教材を絶えず研究することが求

められます。目の前の生徒を丁寧に

見ながら、紙の辞書にこだわる一方

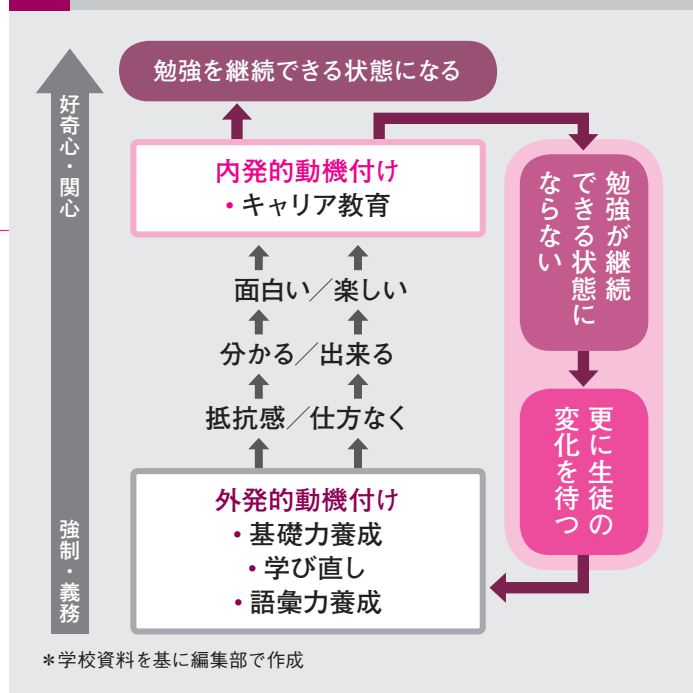
で、アクティブラーニングを導入す

るなど、この学校に合った不易と流

行を考えていきたいですね」（塩冶

校長）

図2 松江西高校における外発的動機から内発的動機への転換



*学校資料を基に編集部で作成